

— 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

わたしたちは風景のなかで生き、そして暮らしています。景^Aシヨウ・絶景といった特別な風景でなく、ここで言う風景というのは、わたしたちの日常の風景のことです。わたしたちの生活の目印、ひいては人生の目印となっているのは、そうした日常の風景です。

自分がそのなかで育てられた風景というものに助けられてわたしたちの経験、あるいは記憶はつくられています。わたしたちの文化もそうです。風景のない文化はありませんし、芸術というものをつねにささえてきたものは、風景を深く見つめる姿勢です。

その意味では、風景^①というのは文化そのものと言っていいのかもしれない。わたしたちの日々を確かにするものは、わたしたちがそのなかで生きて暮らす風景の感受であり、わたしたちが日常の在り方、生きてゆく心の在り方といったものを見さだめる手掛かりとしてきたものもまた、自分たちがそのなかで育った、あるいは育てられた風景です。

たとえ自分ではそうと思っていなくとも、じつは風景のなかで感じ、思い、考えるということが、わたしたちの日々の生き方の姿勢をつくっています。風景のなかに自覚的に自分を置いてみる。すると、さまざまなものがよく見えてくる、あるいは違って見えてくる、ということがあります。

「青空に寒風おのれはためけり」(中村草田男^{なかむらくさたお})という、あざやかな句を思い出しますが、自分を語るのに、青空という風景、寒風という風景の感覚をもってする。そうして風景のなかに、おのれの心像^{こざう}をくつきりと映す。俳句の魅力は、それが季語^{きご}というかたちで、風景が一人の「わたし」を語るといふ秘密をもつ言葉だということだ。

自分たちの暮らしのなかで、経験のもち方、清濁の感覚、そういった一々に、自分が横切り、また突っ切ってきた風景が係わっている。そのように日々の風景を生きて、一人の「わたし」の経験を心に刻むということ、ずっとわたしたちはしてきたように思います。

島崎藤村の『夜明け前』という、江戸から明治への激動の季セツ^Bを生きた人びとの心のたかぶりをえがいた物語に、木曾馬込^{きそまごめ}に住む若い主人公が、自分が生まれ育った馬込を離れて江戸へ旅立つ日の、印象的な場面があります。

旅立ちの日に主人公は、村の外れの、谷をへだてた丘のうえの墓地まで上ってゆきます。そこからは村全体が見える。そうして「あだかも、(……)古い街道の運命とを長い眼でそこに眺め暮して来たかのように」自分の村を眺めます。

村の眺めは杉の木立のあいだに展^{ひら}けています。主人公は「青い杉の葉のにおいを嗅ぎながら」しばらくそこに立って、村をじっと眺める。そして「あそこに柿の梢^{こすえ}がある、ここに白い壁がある」と指さしながら、自分の生まれ育った村の風景を記憶にしっかりと留めて、一人、明日のわからない日々^②に旅立ちます。

わたしたちの一人一人にとつての歴史^いというのは、そういうふう^③にそれぞれの記憶のなかに留められる、生きられた風景のことですが、そうした記憶のなかの風景どころか、いまのわたしたちにとつて切実なのは、逆に、生きられた風景の記憶の欠如^④です。

たとえば、歌は世につれ世は歌につれと言いますが、世のはやり歌というのは風景をうたう歌でした。村に一本杉があり、トンビは空で輪をえがき、赤い夕日は校^がシヤ^かを染め、街の灯^{あか}りはとてもきれいだ。しかしつか若い世^よダイ^だのはやり歌に、風景がうたわれることがなくなると、風景は消失し、歌の世界にのこったのはとめどない感情^{かんじょう}です。

風景の感覚が見失われて、見失われたのは、風景のなかに自分がいるということの自覚です。風景のなかに自分を置くというものは、『夜明け前』の主人公が丘の上から村全体を眺めるように、遠くを見るということ、全体を見はるかすということ^⑤です。そういう見はるかす視点^{しつてん}というものが、いまわたしたちに欠落してしまっているのではないか。

いまは、何事もクローズアップで見て、クローズアップで考えるということが、あまりにも多いということに気づきます。クローズアップは部分^⑧を拡大して、全体を斥^{しりぞ}けます。見えないものが見えるようになった代わり、たぶんそのぶんわたしたちは、見えているものをちゃんと見なくなりました。

風景のなかに在る自分というところから視野を確かにしてゆくことが、いまは切実に求められなければならないのだと思います。

（長田弘『なつかしい時間』^{おまたひろし}）

（注）あだかも——「あたかも」と同じ。

村に一本杉がくきれいだつた——昭和三十〜四十年ごろの歌謡曲の歌詞をもとにした表現。

問一 二重傍線部AとDの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のAと

Eのうちからそれぞれ一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

A ア ショウ敗を占う。 イ 苦勞はショウ知の上だ。

ウ 数学のショウ明問題。 エ 友達をショウ待する。

B ア 間セツ的な影響。 イ セツ備を点検する。

ウ 伝セツ上の人物。 エ セツ度を保つ。

C ア シヤ辞を述べる。 イ 腕に注シヤする。

ウ 選手の宿シヤ。 エ シヤ交性に富む人。

D ア ダイ理で出席する。 イ 広ダイな土地。

ウ 作文のダイ材を選ぶ。 エ 建物の土ダイを築く。

問二 傍線部②・④について説明した次の文の空欄a・bに入る適切なこ

とばを、それぞれ漢字で書きなさい。ただし、aは活用形、bは二字のことばとする。

五段活用の動詞の [a] に「て」や「た」が付くとき、「つくつて」「えがいた」のように音が変化することを [b] という。

問三 傍線部①の理由として最も適切なものを、次のA〜Eから一つ選んで、その符号を書きなさい。

A 芸術を支えてきた、日常の風景を深く見つめる姿勢は、文化の中でつくられるから。

I 文化も日常の風景と同じように、わたしたちの経験や記憶をつくっているから。

ウ それぞれの文化は、その文化に固有の日常の風景に支えられて形成されるから。

E 日常の風景だけでなく、文化もわたしたちの人生の目印となっているから。

問四 傍線部③について、次の問いに答えなさい。

(1) 「俳」について、次の黒塗り部分は何画目か。数字で書きなさい。

俳

(2) 「俳句の魅力」はどのようなところにあると筆者は考えているか。

それを説明した次の文の空欄a・bに入る最も適切なことばを、aは【A群】のA〜Eから、bは【B群】のオ〜クからそれぞれ一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

季語をよみこんで俳句を作るということは [a] ことであり、そのことによつて [b] ことが可能になるといふところ。

【A群】

A 風景の中から生き方の手掛かりを見つけ出す

I 風景の中に自分を置いて風景を感受する

ウ 風景を観賞する感受性を豊かにする

E 自分が感じ、思い、考えることを風景と一体化させる

【B群】

オ 厳しい自然に立ち向かう自分の姿を表現する

カ 同じ風景について以前とは違った表現をする

キ 主観を交えず風景をありのままに描く

ク 風景に託して自分の内面を鮮明に描き出す

問五 傍線部⑤について、『夜明け前』のこの場面を「印象的」だと述べる筆者は、主人公の行為をどのようにとらえているか。その説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 見知らぬ地への旅立ちに際し、自分の生き方や価値観を形づくってきた風景を、心のよりどころとして確かめようとしている。

イ 旅立ちの日を迎え、日々の暮らしの中にあつた風景の美しさに初めて気づき、その風景の一つ一つを心に刻み込もうとしている。

ウ 自分をこれまで育ててくれたふるさとの風景をなつかしむことで、江戸へ旅立つ心のたかぶりをしずめようとしている。

エ 激動の世にあつて、ふるさとの運命が変わっていくことを予感し、旅立ちの前に、昔ながらの村の風景を記憶に留めようとしている。

問六 傍線部⑥の理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 風景の感覚が失われて、最近のはやり歌に日常の風景が歌われなくなってしまうから。

イ 日常の風景の中で自分が生きているという自覚を、わたしたちが失ってしまったから。

ウ 世の中の変化とともに、記憶の中に留められてきた日常の風景が失われてしまったから。

エ 日常の風景の持つ力をわたしたちが見失い、風景を深く見つめなくなってしまったから。

問七 傍線部⑦の意味として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア はやり歌と世間とは、まったく別のものであるということ。

イ はやり歌と世間とは、人々の好みに合わせて変化するということ。

ウ はやり歌と世間とは、互いに影響し合う関係にあるということ。

エ はやり歌と世間とは、ともに人々の感覚を代表するということ。

問八 傍線部⑧について、筆者が「部分」に相当すると考えているものとして適切なものを、波線部ア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

問九 本文における筆者の主張として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 風景の中に置かれた自分を深く見つめることで、対象の細部に絞って見る視点を獲得し、これまでの経験を確かなものにするともに、自分自身の歴史をとらえ直すことができる。

イ 風景の中に自分が存在すると認識することで、全体を包括的に見る視点を獲得し、生まれ育った国の歴史の流れをつかむとともに、自分自身の生き方の指針を得ることができる。

ウ 風景を自分の記憶の中に取り込むことで、過去と現在を対比させて見る視点を獲得し、過去の人々の歴史がよく見えるようになるとともに、自分自身の日常の在り方を見直すことができる。

エ 風景の中に自分を位置づけることで、空間的かつ時間的に遠くを見る視点を獲得し、自分自身の歴史を取り戻すとともに、これから生きてゆく心の在り方を見定めることができる。

二次の文章は、弟の碧郎が通う中学校から母に対する呼びだしの電話がかかってきたことを、学校から帰宅した姉のげんが聞いた場面である。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

うちへ帰ってみると変事が起きていた。もうさきへ帰っているはずの弟がいず、出不精の母が外出して、父親だけが一人で留守をしていた。碧郎の学校から電話があつて、碧郎が同級の子の腕を折つたからと、母に呼びだしが来たのだという。

「腕を折つたつて喧嘩でもしたのかしら？」

「よくわからないんだ。教師もあわてているらしかつたそうで、とにかく行つて見なくてははつきりしないからね。まあおよそは、もの弾みでそんなことになつたと思うのだが、故意のことのように言つたというんだ。①なあに、母さんの聞きがちがえかもしれないんだ。」いつも通り机に座つてしごとはしていても、父は案じておちつけないらしい。煙草ばかりふかして報告を待つていた。

「 でも故意でも、どうなるのかしら？ 罪になるの？」

父はときどき沈んで、「そんなことはないと思う。しかし故意と言われれば、そしてそれが間違ひなくそうなら、正しく考えなくてはなるまいが、B取り越し苦労は益のないことだ。それより私やおまえの今することは、相手の子の怪我がどうか軽くて済むようにと祈ることだ。誰のどうした怪我であろうと軽くて済むなら、……」

そうなのだ。その子の怪我が何でもない軽いものであつて、大騒ぎをしたというだけで済めば、したがつて弟の間われかたも軽く済むことなのだと思える。と思つてきて、げんはぎよつとした。つい今、故意と聞いたとき咄嗟には、あんなにきつくそんなばかなことあるか、碧郎が人に故意の怪我をさせるような恐ろしいことをするものかと、心から思いが噴きこぼれるほど反発したのに、いつの間になのか、父と話しているうちに、「故意にした」に傾いたような思ひかたをしているのである。父は故意を信じたくない話しぶりを見せていた。あたりまえである。そして自分も故意だ

なんて思いたくないのである。だのになぜ故意めかしく受け取りそうに気が動くのだろうか。相手の怪我が軽ければ弟も軽く許されるだろうと思う心は、なんとなく後ろめたく故意を呑みこんだようなところがある。故意②ということばには、おかしく惑わす力がある。碧郎はおそらく教員室、あるいは人気のない講堂の片隅などというところに留めておかれているのだろう。あるいは怪我した子の両親が駆けつけて来て面罵したかもしれないし、訊問されているかもしれない。それにうちの母はどう碧郎をかばつてくれているだろうか。母もげんのように故意に惑わされてはいはしないか。色白な皮膚、細い頸、紺の制服をだぶだぶと着て、見るからにきやしやな新入生である。言い負かされてはいはしないかという不安が感じられる。孤立している困難な立場を思う。腹立ちつぼくて強情つぱりで、か細い神経なのだ。けさ並んで歩いて行つたとき、「姉さんがかわいそうだった」と言つたことが、きゆうと熱く思ひだされる。

「お父さん、あたし心配だから、学校へ電話かけて様子訊きたいけど、いけないかしら？」

「まあもう少し待つてみよう。面倒なことになつてゐるなら母さんから一言言つて寄こすだろう、長引くとか何とか。」

③犬が夕食を催促してげんのあとしり、ついて回るが、人の心を見ぬく利口な動物は頭を抱きよせられると、じつと素直にいつまでも抱かれていて哀しい。

暮れきつて母は疲れた顔つきで、弟を連れて帰つて来た。いつもならもうしごとを切りあげて茶の間へ来ている父なのに、きょうは机の前から起たずに碧郎を待つていた。母はそのまま父のところへ行つたが、碧郎は促されても父の前へ行くのを無言で拒んだ。

「どうしたの？」

ちよつと眼を上げて姉の方を見、すうつと涙が眼頭と眼尻へ盛りあがつてこぼれた。「知らねえや。」

瞬間を置かず哀しさが姉へのりうつつてきた。そうだろうと思つたのは

あたっていた、とげんは判断した。「でもね碧郎さん、お父さんはあんなこと心配していたのよ。心配ないからお父さんにあんなの言いぶん話さないよ。考えてくださるわ。」

「嘘だ。先生の前でさんご母さんに言われたぞ。主人はこの子をかかわりすぎてわがまま放題にしたので、いまでは手に負えなくなつて時々は困っていますなんて。きつく叱ってもらいますなんて、父親も嘆いておりましたなんて。——どっちがほんとなんだ！ どうせぼく、ぼく……」と言うと、いきなり起つて納戸へ行き、納戸の壁へ蜘蛛のようにはばりついてしまった。

父が報告を一通り聞いてから納戸へ行った。哀しいのを隠した口調で、「おい、出て来いよ。お父さんと話さないか。おまえもくたびれただろ。こつちへ来て飯でもたべようじゃないか、姉さんが何かこしらえてくれるよ。」

⑤ げんは父を、いいなあと思つて胸がつまった。

(幸田文『おとうと』)

(注) 碧郎が同級の子の腕を折つた——これは後に、碧郎が故意でしたことではないとわかる。

「姉さんがかわいそうだった」——雨の中、手ぬぐいを渡そうと必死で碧郎を追いかけた、前日のげんの姿を振り返つて、碧郎が言つた言葉。

納戸——屋内の物置部屋。

問一 波線部ア・イの読み方を平仮名で書きなさい。

問二 二重傍線部A・Cの本文中の意味として最も適切なものを、次の各

群のA・Bからそれぞれ一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

A ア 何の前触れもなく イ その場のなりゆきで

ウ やむにやまれず エ 咄嗟の判断で

B ア 必要のない心配 イ 余計なお世話

ウ 無駄な配慮 エ 見せかけの苦悩

C ア 腹立たしく イ やましく

ウ 悲しく エ たまらなく

問三 傍線部①からうかがえる父の心情についての説明として最も適切なものを、次のA・Bから一つ選んで、その符号を書きなさい。

A げんに対して母の早とちりを冗談めかして言うことで、その場の張り詰めた雰囲気や少しでもやわらげようとしている。

イ あえて明るい調子でげんに接することで、碧郎を疑っている自分の気持ちをげんに悟られないようにしている。

ウ 母の誤解だとげんに言い聞かせることで、母が碧郎をかばおうとしないのではないかと疑うげんをたしなめている。

エ げんを安心させるような楽観的な見方を示すことで、碧郎は大丈夫だということを自分自身にも言い聞かせている。

問四 文中の空欄に「故意」の対義語で、「不注意からよくない結果をまねくこと」という意味を表す適切な漢字二字のことばを書きなさい。

問五 傍線部②について、次の問いに答えなさい。

(1) げんが、「故意ということば」に惑わされている自分に初めて気づいた様子がわかる表現を、本文中から五字以上十字以内で抜き出して書きなさい。

(2) 「おかしく惑わす力」の説明として最も適切なものを、次のA・Bから一つ選んで、その符号を書きなさい。

A 相手の怪我が軽ければ弟の責任も軽くなると安心していたげんにさえ、故意にしたことなら決して許されないと不安に思わせる力。

イ 弟が故意にしたことかどうか公平に判断すべきだと分かっているげんをさえ、弟に罪はないという偏つた考えに誘い込もうとする力。

ウ 弟の行為が故意であるはずがないと自分に言い聞かせるげんにさえ、弟には自分の知らない別の顔があるとの疑念を抱かせる力。

エ 弟が故意で怪我をさせたとの知らせに激しく反発したげんをさえ、弟の行為が故意であることを前提とした考え方に引き込む力。

問六 傍線部③の一文の働きを説明したものと最も適切なものを、次のア〜エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 人の心を見抜いきつまでも抱かれている犬の姿を描くことで、碧郎の帰りを待つしかないげんのせつなさと、その時間の長さを表す。

イ げんについて回る犬の姿を描くことで、かつてはげんを慕っていた碧郎が手の届かない存在となったことを寂しく思う気持ちを表す。

ウ 素直に抱かれている犬の姿を描くことで、碧郎に素直さを取り戻してほしいというげんの切実な願いと現実との隔たりを表す。

エ 普段どおりの犬の姿を描くことで、逆に碧郎が窮地に立たされていることをきわ立たせ、げんの動揺がおさまらないさまを表す。

問七 傍線部④に至る碧郎の心情の説明として最も適切なものを、次のア〜エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 母の言葉から父にまで厄介者と思われているとわかり、悔しい気持ちで帰宅したが、父の肩を持つような姉の言葉を聞いて誰一人自分を理解してくれないと感じ、やりきれなく思っている。

イ 学校で母が自分をかばってくれなかったことにふてくされて帰宅したが、姉までもが自分の言い分を聞こうとせず、よそよそしい態度で接することに深く傷ついている。

ウ 先生の前で自分を厳しく問い詰めた母と違い、父は優しく受け入れてくれるだろうと信じて帰宅したが、部屋にこもったまま自分を迎えてくれようとしないうちに父に対して激しく反発している。

エ 母の発言から父も信用できないということを思い知らされ、深い孤独感を覚えて帰宅したが、父を弁護する姉の発言に次第に心を動かされ、父に相談するかどうか迷っている。

問八 傍線部⑤について、げんは父のどのような姿を「いいなあと思って胸がつまった」のか。その説明として最も適切なものを、次のア〜エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 碧郎が故意にしたのではないかという疑いがぬぐいきれない自分と違い、碧郎を疑うそぶりをまったく見せず、言葉を尽くしてわが子をいたわろうとする父の姿。

イ 碧郎が素直に助言を聞かないことにいらだつ自分と違い、同じいらだちを感じつつも、碧郎と家族の関係をこれ以上こじらせないよう努めて冷静に話しかける父の姿。

ウ 碧郎の哀しみを知りながら受け止めきれなかった自分と違い、碧郎の哀しみを共感的に受け止め、それを胸におさめてさりげなくわが子に寄り添おうとする父の姿。

エ 碧郎の哀しみを理解しようとしていなかった自分と違い、碧郎をあしざまに言う母の報告に衝撃を受けながらも、わが子の哀しみを理解しようと優しく接する父の姿。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

孝道入道、仁和寺の家にて或人と双六をうちけるを、隣に住んでいる越前房と

いふ僧きたりて、見所すとて、様々のさかしらをしけるを、にくしにくし

と思ひけれども、物もいはでうちるたりけるに、この僧さかしらしさして

立ちぬ。かへりぬと思ひて、亭主、「この越前房はよき程の者かな。」と

いひたりけるに、かの僧いまだ帰らで、亭主のうしろに立ちたりけり。

かたき、また物いはせじとて、亭主のひざをつきたりければ、うしろへ見

むきて見れば、この僧いまだありけり。この時とりもあへず、「越前房は

高くもなし。低くもなし。よき程の者な。」といひなほしたりける、心は

やさ、いとをかしかりけり。

問一 二重傍線部を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問二 傍線部①・⑥の本文中の意味として最も適切なものを、次の各群の

① ア 的確な助言

ウ 親切な説明

⑥ ア 仕方なく

ウ うろたえて

イ 余計な口出し

エ 根拠のないうわさ

イ おもむろに

エ 即座に

問三 傍線部②と⑤の主語の組み合わせとして適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア ② 孝道入道 ⑤ 「或人」

イ ② 孝道入道 ⑤ 孝道入道

ウ ② 越前房 ⑤ 「或人」

エ ② 越前房 ⑤ 孝道入道

問四 傍線部③の意味として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア いい加減な人だなあ。 イ 頭の良い人だなあ。

ウ 気配りのできる人だなあ。 エ 頑固な人だなあ。

問五 傍線部④の動作の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 孝道入道が「或人」に陰口を言わせないようにするための動作。

イ 越前房が「或人」に虚言を言わせないようにするための動作。

ウ 「或人」が孝道入道に非難めいたことを言わせないようにするための動作。

エ 越前房が孝道入道に負け惜しみを言わせないようにするための動作。

問六 傍線部⑦は、何について述べたものか。最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 皮肉を言われたことに対して、同じ言葉を使ってうまく言い返し、相手をやり込めた機転。

イ 悪口を本人に聞かれてしまったので、同じ言葉を使つてはぐらかし、その場を切り抜けた機転。

ウ 自分の言葉が誤解されていると気づき、同じ言葉を効果的に用いて全員を納得させた機転。

エ 相手の言葉が嫌味であることに気づき、その言葉を褒め言葉として受け止めて場を丸く収めた機転。

四 次の漢文と解説文を読んで、あとの問いに答えなさい。

柳下恵、士師と為りて、三たび黜けらる。人曰はく、「子未だ以て去るべからざるか。」と。曰はく、「道を直くして人に事ふれば、焉くに往くとして三たび黜けられざらん。道を枉げて人に事ふれば、何ぞ必ずしも父母の邦を去らん。」と。

柳下恵、為士師、三黜。人曰、「子未可去乎。」曰、「直道而事人、焉往而不三黜。枉道而事人、何必去父母之邦。」

(解説文) この文章は、aとその弟子たちの言行録である『論語』の一節で、柳下恵という人物にまつわる話である。

柳下恵は、裁判官となったが、度々免職された。ある人が「まだこの国を去ろうとしないのか。」と尋ねた。すると、柳下恵は、「b君主に仕えるならば、今の世の中では、どこの国に行っても度々免職される。また、もし信念を曲げて君主に仕えるとするならば、どこの国に行っても官職につくことができる。どうしてわざわざ祖国を去る必要があるのか。」と答えた。

問一 書き下し文の読み方になるように、傍線部①に返り点をつけなさい。

問二 傍線部②とは、どこから「去る」のか。漢文から四字で抜き出して書きなさい。

問三 空欄 a に入る中国古代(春秋時代)の思想家を、漢字二字で書きなさい。

問四 空欄 b に入る最も適切なことばを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 出世の近道を意識して
イ 地道な努力を重ねて
ウ 政道を改めようとして
エ 正しい道理に従って

問五 本文から読み取れる柳下恵の考え方として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 信念を貫く以上たとえ他国に行っても免職は避けられないので、祖国で官職につくことにこだわる柳下恵は、何度免職されても恥を忍んで人に仕える生き方を選ぶ。

イ 何度免職されたとしても、自分の信念を貫いた上でのことならば何ら恥じることはないと考えた柳下恵は、信念に従い、祖国にとどまる生き方を選ぶ。

ウ 祖国にとどまろうが他国に行こうが免職されることに変わりはない、官職につくことを無駄だと考える柳下恵は、祖国にとどまって静かに暮らす生き方を選ぶ。

エ 祖国にとどまるためには、信念を曲げて官職につく必要があるため、祖国にとどまることにこだわる柳下恵は、信念を曲げて人に仕える生き方を選ぶ。